

恩地孝四郎《南海への思念》1942年 和歌山県立近代美術館蔵

Topics

日本の版画・1941-1950・「日本の版画」とは何か

芳年・芳幾の錦絵新聞ー東京日々新聞・郵便報知新聞全作品ー

市民のための美術コレクションケア展 家庭でできる作品の管理

# 日本の版画 1941-1950

## 「日本の版画」とは何か



恩地孝四郎《『氷島』の著者・萩原朔太郎像》1943年 木版 千葉市美術館蔵



奥山儀八郎《古式三段構之図》1941年 木版 松戸市教育委員会蔵



加藤太郎『JEU D'OBJET 2』より《慾望》1945年 木版 郡山市立美術館蔵

「〇〇年代」という物言いには不思議な力があります。当時最先端だったファッションが鮮やかに浮かんだり、その時代の流行歌が耳によみがえったり……。けれども「1940年代」と聞いた時、何かひとつのイメージを思い描くのはとても難しいのではないのでしょうか。昭和でいうと16年から25年までのこの時期は、太平洋戦争の始まりから敗戦を経て、復興がようやく形を成そうかという頃にあたります。「戦中」と「戦後」はまるで別世界の出来事のように、わけて語られることが多いようです。けれどもいうまでもなく人々の暮らしも、作家たちの制作への渴望や模索も世相とともに、時に超然と続いていました。本展は、その1940年代にどのような版画が生まれたのかを探る試みです。

展示は恩地孝四郎による《『氷島』の著者・萩原朔太郎像》から始まります。制作されたのは1943年、美術界の統制が進み、美術雑誌や展覧会など活動の場が次々に奪われてゆく頃でした。恩地は前年に世を去った敬愛する詩人を、髪は乱れ、目は空ろな悽愴たる姿で描きだしています。私たちが写真で知る朔太郎とは少し違うかもしれませんが、それは不自然なほどに多く、深く皺の刻まれた顔に恩地が自身の苦悩を重ねたからでしょう。背景から改めて目を転じた時、本作が不幸な時代そのものの肖像画のように見えてはこないでしょうか。

戦中の空気を映す作品としては、軍部や前線への献納版画があります。あまり知られていませんが、《萩原朔太郎像》が制作されたと同じ1943年、大政翼賛会のもとに版画界の統制団体である「日本版画奉公会」が設立されました。本会に属して何らかの奉公をしなければ、画材も手に入らないような事態が出来たのです。献納版画の主題は幕末の志士や国技、各地の護国神社などが選ばれましたが、奥山儀八郎の《古式三段構之図》はそうした一点。彫師と摺師の手を経た伝統木版(それは時に「国粹版画」と呼ばれました)による作品です。当時の資料は敗戦とともに処分されたものも多く、出品作はごく一部にすぎません。またこうした作例を掘り出し、見る行為に痛みが伴うのも事実ですが、過去に封をせず、まずは戦中に何が行われていたのかを知ることが重要だと思います。

戦中の空白期に妖花を咲かせるようにして作品を残した人に加藤太郎がいます。早くから版画界期待の新人と目されながら24歳で応召、軍隊ではあえて下位の古参兵にとどまって絵ばかり描いていたといいます。やがて病を得て除隊となり、1945年に制作したのが『JEU D'OBJET』という木版画集でした。蝶の羽が拳銃や花に変容する構成にはシュルレアリスムへの傾倒が明らかですが、それだけで

は説明のつかない、時代から隔絶した表現の強さがここにはあります。縦・横ともに15cmにも満たない小品ながら、卓越したデザイン力と自在な刀遣い、そして特異な想像力による造形は他に類がありません。しかしながら同年6月、この鬼才は敗戦を知ることなく結核で没しました。

戦争が終わると、一気に流れ込む欧米美術と歩みをあわせ、戦中には発表できなかった抽象版画が開花します。山口源は恩地門下で技を磨いた人。早くから幾何学的な構成を志向していましたが、1948年頃から抽象木版へ、さらには葉や紐、木端などを転写した物体版画へと進みます。山口のような動向は国内のみならず世界でも高く評価され、彼らの作は50年代以降国際展で受賞を重ねるようになりました。「日本の版画=浮世絵」という根深い構図が、ようやく覆され始めたのでした。

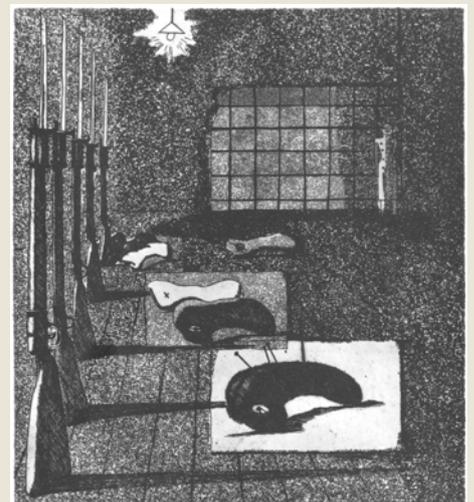
その一方で、具象に固執し続ける浜田知明のような作家もいました。活躍期はすでに50年代に入っていますが、展覧会のエピソードとして見ていただきたいと思います。浜田は5年に及ぶ軍隊生活のなかで、抽象も再構成も、整頓すら難しい圧倒的なものを見ました。画壇の大勢が瀟洒な抽象構成に傾いても、彼が執拗に刻んだのは虫けらと化した初年兵であり、串刺しされた人の肉塊であり、幾度も空想した縊死する自分でした。誰かを虫けら同然に扱い、また扱われる人の愚かな姿—浜田が反復したイメージは、私たちは二度とここに戻ってはいけないと語り続けています。

1940年代は、総じて戦争に翻弄された時代といえます。そのなかで、戦争がそうであるように、版画界でも「日本」が切実に問われました。日本国の版画家として戦争といかに対峙するか、また終戦後に世界という舞台が見えてきた時、日本独自の表現とは何なのか—。それが「日本の版画とは何か」という副題をつけた理由です。戦後と戦中がくっきりと明暗にわかれるほど事態は単純でもありませんでした。その多様さ、複雑さも展覧会の見所のひとつです。

本展は千葉県美術館で1997年以来開催しておりますシリーズ展「日本の版画」の第五弾であり、最終回にあたります。近代版画とい



山口源《失題》1950年 物体版画 沼津市庄司美術館蔵



浜田知明《初年兵哀歌(銃架のかけ)》1951年 エッチング・アクアチント 町田市立国際版画美術館蔵

うささやかな分野ではありますが、担当としては実に10年以上に及ぶ大企画となりました。過去の回に続けてご覧いただけるとしたら担当冥利につきますが、初めてのカタにも近代版画の魅力が伝われば幸いです。

[学芸員 西山純子]

## 【関連イベント】

### (1) スペシャル講演会「近代日本の版画を考える」

2月9日(土) / 14:00より / 11階講堂にて / 先着150名 / 聴講無料

第一部：「伝統版画の系譜をたずねて」

【講師】岩切信一郎(東京文化短期大学教授)

第二部：「創作版画の展開をたどって」

【講師】三木哲夫(国立新美術館副館長)

主催：千葉県美術館・国際浮世絵学会

### (2) ワークショップ

「蔵書票を作ろう～本好きのための小さな世界を摺(す)る～」

2月2日(土)・3日(日) / いずれも11:00～15:30(随時) /

美術館1階エントランスにて / 参加無料

\*申込みは不要(材料がなくなり次第終了)。本の見返し部分に貼って持ち主のしるしとする絵入りのカード「蔵書票」を木版で摺(す)ります。名前を書き込める図柄を用意します。

## 日本の版画・1941-1950・「日本の版画」とは何か

2008年1月12日(土)▷3月2日(日)

10:00 - 18:00 (金曜日・土曜日は20:00まで)

\*入場受付は閉館の30分前まで

【休館日】 第1月曜日(2月4日)

【観覧料】 一般 800(640)円

高校・大学生 560(450)円

小・中学生 無料

\* ( )内は団体30人以上・前売料金および市内在住60歳以上

\*前売券は、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(3月2日まで)にて販売

# 芳年・芳幾 の 錦絵新聞

東京日々新聞・郵便報知新聞全作品

錦絵新聞の「東京日々新聞」と「郵便報知新聞」は明治期の錦絵新聞の双璧として名高いものです。千葉市美術館には、リッケンコレクションという、幕末から昭和にいたる版画作品2000点余が寄託されており、中でも明治期の錦絵新聞は非常に充実しています。そこで、この度、「東京日々新聞」と「郵便報知新聞」の大判作品を一堂に展示し、錦絵新聞が流行した時代を考えるとともに、二つの錦絵新聞を担当した浮世絵師、たいそよしとし大蘇芳年といっけいさいとしく一蕙斎芳幾の絵を比較鑑賞しようという企画を立てました。リッケンコレクションにない作品は、早稲田大学と東京大学からお借りして展示いたします。

## 錦絵新聞とは

錦絵とは、江戸時代中期に完成された多色摺り浮世絵版画のことです。したがって江戸時代中・後期の浮世絵版画はほとんどすべてが錦絵ということになります。一方、今に連なる近代の新聞は、明治3年12月の「横浜毎日新聞」に始まります。明治5年には、「東京日々新聞」(2月)、「郵便報知新聞」(6月)が相次いで創刊され、本格的な新聞の時代を迎えますが、漢文調・文語体の文章は、まだまだ一部の知識人のものでした。そういう状況にあって、新聞記事のうち、錦絵の購買者にも喜ばれそうなものを取り上げて、面白くやさしい解説付きの錦絵として刊行したのが錦絵新聞です。錦絵新聞は、錦絵の判型である大判・中判といった形で、絵草紙屋から刊行されました。展示する錦絵新聞に記されている号数は、元の新聞の号数です。したがって、記されている号数の新聞の発行年月日と、錦絵新聞の発行年月日は最大で2年ほどずれが生じています。そして、古い号の錦絵新聞が、早く刊行されたとは限りません。今回の展示では、錦絵新聞に記されている号数順ではなく、錦絵新聞が刊行された順番に並べることにいたしました。ただし、刊行年月の記載のない作品も多いので完全ではありませんが、その意図を汲み取っていただければ幸いです。錦絵新聞のなかには、基になった新聞記事のない、錦絵の形を取った新聞もあります(大阪のものに多い)、今回は展示していません。

## 「東京日々新聞」とは

錦絵新聞のなかで最も早く出され、そして最も多く出されたものです。明治7年8月頃から明治9年まで、大判あるいは大判三枚続のものが114点以上刊行されました。絵は歌川国芳の弟子の一蕙斎芳

幾で、版元は具足屋嘉兵衛です。芳幾・条野伝平・西田伝助という「東京日々新聞」を創刊した3人がやはり錦絵新聞の創刊にも加わっています。明治7年10月頃には摺りが間に合わないほど飛ぶように売れ、錦絵新聞ブームを作り出しました。



『東京日々新聞 第697号』

## 「郵便報知新聞」とは

明治8年2月から、「東京日々新聞」に対抗する形で出された錦絵新聞です。明治10年まで大判あるいは大判三枚続のものが63点以上刊行されました。絵は芳幾の弟弟子の大蘇芳年で、版元は錦昇堂恵比寿屋庄七です。解説記事と絵が上下に分かれているのが「東京日々新聞」と異なります。また、新聞の「郵便報知新聞」の関係者が企画に加わった形跡も今のところありません。「東京日々新聞」と「郵便報知新聞」を合わせると、東京で刊行された錦絵新聞の70パーセントに上ります。

【学芸課長 浅野秀剛】



『郵便報知新聞 第1272号』

## 芳年・芳幾の錦絵新聞

—東京日々新聞・郵便報知新聞全作品—

2008年1月12日(土)▷3月2日(日)

10:00—18:00(金曜日・土曜日は20:00まで)

\*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 第1月曜日(2月4日)

[観覧料] 一般 200(160)円

高校・大学生 150(120)円

小・中学生 無料

\* ( )内は団体30人以上の料金

\* 同時開催「日本の版画・1941-1950」展のチケットをお持ちの方は無料

# 市民のための 美術コレクションケア展

「コレクション」と聞くと有名な作家の高価な作品をイメージするかもしれませんが、たとえばお孫さんが描いた作品など、皆さんやご家族にとって大切な作品があれば、これもりっぱなコレクションです。

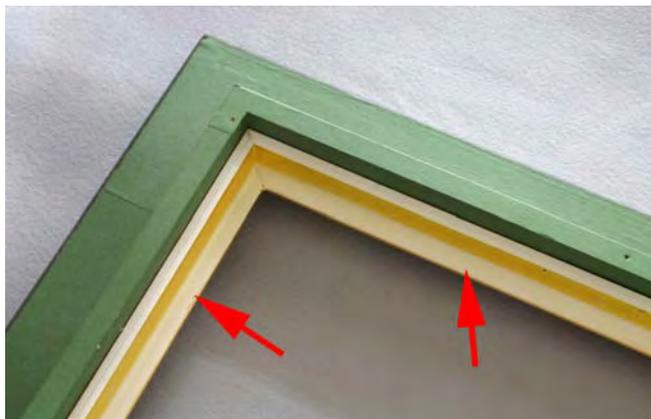
美術展覧会に出かけると、100年、200年、もっとずっと以前に制作された作品を見ることができます。それは作品がその時々所有者に大切に守られた証しです。作品はその年数に応じたケアを受けながら次の世代に伝えられているのです。今は美術館に所蔵されている作品も、もともとは作家本人や家族、美術愛好家などの個人が所有していたものが多いと考えてよいでしょう。まずは個人が作品を大切にケアしなければ、作品が次の世代に伝えられることはありません。皆さんのご家庭でこそコレクションケアを考えていただかなければならないのです。

美術作品には、展示、保管、移動など、さまざまな場面で危険が生じます。傷んでしまった作品は専門家による処置が必要になりますが、作品が傷む前にケアすることが大切です。今の冬の季節、日の光が差し込む暖かい部屋に置いた新聞や手紙などが反り返った様子を見たことはありませんか。これは紙が過剰に乾燥したときに見られる現象です。乾燥した紙は柔軟性を失い破れやすくなっています。同じ部屋に美術作品が置かれていれば、その作品も壊れやすい状態にあると言えます。温度と湿度の管理は重要なコレクションケアのひとつです。

作品の傷みを防ぐ方法のひとつとして、油彩画の額装にも家庭のできるアイデアがあります。作品を額装すると、画面の周辺部分は額の刃先(ハサキ)に当たります。輸送はもちろん、家庭の中の移動でも、作品に振動が加わると刃先と画面が擦れて絵具が削れてしまいます。絵具が十分に乾いていないと画面と刃先が密着して、作品を額から外す際に絵具が剥がれる事故につながります。これを避けるために、作品の側面に薄い金属などの板を、上辺が画面より少し高くなるように装着してから額装します。刃先にはこの金属板だけが当たり、画面を擦れから守ることができます。展覧会会場にはこの金属板も展示します。

ACP美術保存パートナーズはさまざまな分野の作品制作、保存修復の専門家の集まりです。2007年3月に横浜美術館で「市民コレクターのための美術品ケア」を開催しました。今回、千葉市美術館と共同で開催する「市民のための美術コレクションケア展」はその第2弾です。あらたに工藝を加え、専門家による処置と、ご家庭での作品のケアの方法を紹介します。この展覧会を機会に、皆さんの「コレクション」の状態をチェックしていただきたいと願っています。

[ACP美術保存パートナーズ/西洋絵画担当  
beacon art studio 鈴木淳]



額の内側

作品が刃先(矢印部分)に当たって額に固定される。



刃先擦れ防止プレートの装着

作品の側面4箇所にてプレートを当てて12-15mm程度の釘で固定。



刃先擦れ防止プレート

プレートの上辺が画面より少し上に出るように固定して、画面が刃先に触れることを防ぐ。写真は0.4mmのアルミ板。作品と額の内枠のあいだに余裕があれば、2mm程度の薄い木板でも作成できる。

## 市民のための美術コレクションケア展 家庭でできる作品の管理

2008年1月8日(火)▷1月20日(日)

10:00 - 18:00 (金曜日・土曜日は20:00まで)

[休館日] 会期中無休

[観覧料] 無料

[会場] 千葉市美術館9階市民ギャラリー

## アートをもっと身近に ～アウトリーチの試み2つから

当館では、昨年の秋から冬にかけて、プラネタリウムをもつ千葉市科学館のオープンにあわせて、所蔵作品の中から星や宇宙に関連する現代アートを集めた展覧会「星をさがして」を行いました。会期中、3つの小学校から団体鑑賞を受け入れることができましたが、子どもたちのほとんどが、美術館へ来るのは初めて。この機会に作品との良い出会いを果たしてもらいたい、それが鑑賞教育に携わるスタッフ全員の願いでした。

「昨日の月はどんなかたちをしていたっけ。」「冬は星がきれいに見えるよね。」そんな会話をしながら、グループごとに展示室に向かいます。会場入り口から続く細い通路の先に待っているものを想像しながらリーダーについて一列で進み、暗い展示室に入ると、目の前にはデジタルカウンターの青い光の海が……(宮島達男《地の天》)。皆一様に息をのみますが、スタッフに促され、しばらくじっと眺めていると、そのしぐみに気づきはじめます。たくさんある「星」の中に、自分の鼓動と同じリズムでカウントする光を見つけ出す頃には、作品の世界にすっかり引き込まれているようでした。

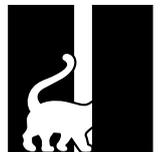
また、広い壁一面を使った作品(野村仁《ムーン・スコア》)の前には、作家が電線にかかる月を見て楽譜を連想したという制作のエピソードをききながら、その不思議な音楽をじっと見つめる姿がありました。宇宙の謎が日々明らかになってゆく時代に育っても、月や星が、想像力をくすぐる身近な異世界であることに変わりはないのでしょうか。



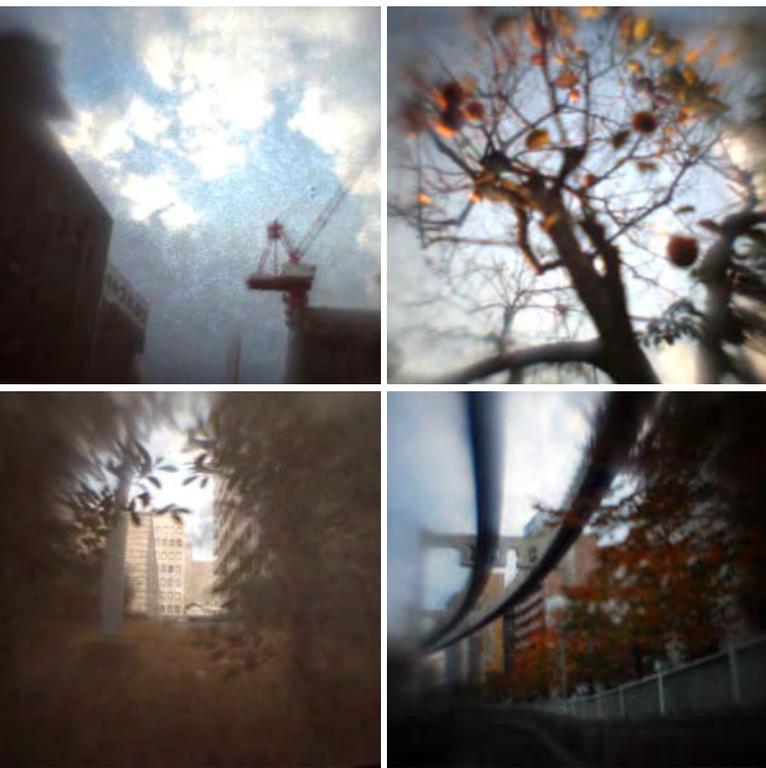
「星をさがして」会場にてリーダー(鑑賞教育スタッフ)と作品をみる小学生



## 猫道のたどり方



ちょうどこの展覧会が開催されていた時期の話になります。大学や地域の人々とともに取り組んできたWi-CANプロジェクトの中で、美術家の小山田徹さんとともに今回私たちが取り上げたのは、「散歩」でした。中心市街地ににぎわいを取り戻すために、ここ千葉でも「歩きたくなるまち」の実現を目指して、様々な努力がなされています。そのような中、現状のまちを歩くことにアーティストの視点を取り入れてみたらどうなるか、というもの。



カメラオプスクラによって切り取られた風景

散歩を楽しむための小道具として使った「カメラオプスクラ」は、原始的なカメラ。虫眼鏡のレンズをつけた正面の穴を通して箱の中のスクリーンに映る景色は、周辺がぼやけて幻想的に。光のしくみによって、赤い色が特に鮮やかに見えるとのこと。

あわただしい日常生活のなかで、「歩く」ことは、ただ単に行動範囲の起点と終点を結ぶためだけの行為に終わりがちです。通勤・通学ルートなど繰り返されるものがほとんどですが、起点を変えてみることで、歩き始める前に終点を設定しないこと(行き先を知るのはスタッフのみ)、新しい視点とささやかな仕掛けの導入、日常の行為の組み直しが、シンプルだけれども奥の深い散歩の楽しみをあらためて教えてくれます。

夜空を見上げて宇宙に思いをはせ、そのかけらから想像を膨らませてゆくこと、散歩をとおして、目に入るもの、手に触れるものを集め、日常のなかに新たな風景を見つけてゆくこと。この2つは、どこか共通する作業といえるのではないのでしょうか。ほんのわずかなきっかけで、世界やものごとの全く異なる部分に気づくことがあります。現代アートの切り口は、そのようなものを、はっとするほど鮮やかに、私たちの目の前に示してくれることがあります。それでも、アートや美術館が心ならずも築いてしまう壁や距離があるならば、少し手を添えて良い出会いをアレンジしたい、アウトリーチの試みは、そんなスタッフ一人一人の気持ちに支えられているといえるでしょう。

[学芸員 山根佳奈]

## ボランティア日和 episode15

私は二年前、美術館ボランティア二期メンバーの一人として新しく登録させていただきました。

活動の初回は、その年の夏に開催された「イギリスの美しい本」展の関連企画で、「本をつくらう」というワークショップでした。手づくりの「マイブック」を一枚の紙を折るところから作っていくのです。果たして、どのくらいの参加者がおり、本は時間内にできあがるのか不安はありましたが、三年先輩の一期メンバーの方々の頼もしいリードと、一人一人の熱意と創意工夫で、お客様に選んでいただく三種類の本(切り込み本、中とじ本、四つ目とじ本)を決め、紙の選択や道具の準備、製本の手順を覚えていきました。また、木版で美しいスタンプをメンバーの一人が彫り上げ、表紙を飾りました。そして、美術館の方々とも協力して、いよいよ当日。夏休み企画でもあり、親子連れはもちろん、ベビーカーを押したお母さん、熟年の方々など、定員を超える盛況にビックリ。午前・午後の部とも、満席でした。

私は、中とじ本を担当しましたが、小学校低学年の男子は製本に四苦八苦しながらも、でき上がった本を大事そうにかかえ笑顔を見せてくれました。高学年の女子はていねいに時間をかけ、仕上げの

スタンプもじっくり選んでこだわりの本ができあがりました。こうして、全員が時間内に本を仕上げることができたのです。

今回、たくさんのお客様に参加していただき、私にとって忘れられない夏になりましたが、これからも大いに美術館を楽しんでいただき、私もボランティアとしてお役に立てればと思っています。

[美術館ボランティア 荒木幸子]



ワークショップ「本をつくらう」の様子

## ◎「文承根+八木正 1973-83の仕事」展 シンポジウム+講演会

昨年10月6日(土)、「文承根+八木正」展関連企画として、シンポジウム「1970年代・高松次郎以後」を開催しました。この分野の第一人者である美術評論家3氏(中原佑介、峯村敏明、建畠哲)をお迎えし、文承根と八木正が活動した1970年代の美術状況について、様々な角度から率直な意見を交換していただきました。

また翌7日(日)には、千葉成夫氏による講演会「1970年代とは何かー思想的見地から」が行われました。難解といわれる70年代日本美術を、多数のスライドを交えて分かりやすく解説していただきました。



講演する千葉成夫氏

## ◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

今年度は近世から現代まで、さまざまな時代のアーティストたちについて当館スタッフが毎回わかりやすく解説します。参加は無料です。

[時 間] 14:00より(開場は30分前)

[場 所] 千葉市美術館11階講堂

[定 員] 先着150名(入場無料)

○第8回 1月19日(土) 「芳年と芳幾ー錦絵新聞を中心にー」  
[講師] 浅野秀剛(本館学芸課長)

○第9回 2月16日(土) 「恩地孝四郎ー版に詩を刻むひとー」  
[講師] 西山純子(本館学芸員)

○第10回 3月1日(土) 「橋口五葉の素描と版画」  
[講師] 小林忠(本館館長)

## ◎千葉市科学館とのチケット相互割引を始めました!

昨年10月20日、千葉市美術館から徒歩5分のところにある複合施設「Qiball(きぼーる)」内に、千葉市科学館がオープンしました。科学館のチケットまたはメンバーズカードをお持ちの方は、美術館の受付にお持ち下さい。企画展と所蔵作品展が団体割引料金(2割引)にてご観覧いただけます。(科学館の利用日から3ヶ月後の同日まで、1枚で1回ご利用が可能です。)

同様に、美術館のチケット(観覧日より3ヶ月後の同日まで有効)または美術館友の会会員証を、科学館の受付にお持ち下さい。科学館の常設展、プラネタリウム券が割引(2割引)となります。(ただし科学館のセット券、特別展、企画展は対象外です。)



## [交通案内]

- ◎JR千葉駅東口より徒歩約15分
- ◎千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分
- ◎バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩2分
- ◎京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
- ◎東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
- ◎地下に駐車場があります

## [編集・発行]

千葉市美術館  
〒260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8  
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316  
Chiba City Museum of Art  
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan  
<http://www.ccma-net.jp>  
[発行日] 2008年1月4日  
[印刷] 半七写真印刷工業株式会社

 **千葉市美術館**  
Chiba City Museum of Art